

論文審査結果の要旨

論文提出者氏名 山内貴史

診断基準 DSM によると、被害妄想とは、自分が攻撃されている、悩まされている、だまされている、迫害されている、陰謀を企てられているという誤った信念と定義され、統合失調症の代表的症状であるとされる。一方、被害妄想ほど奇異ではない、自分が何らかの方法で悪意をもって扱われているという“被害観念”は、精神疾患の診断基準を満たさない健常者にもみられることが報告されている。近年、統合失調症などにみられる被害妄想と健常者にみられる被害観念との間の連続説を理論的背景とし、被害観念を対象としたアナログ研究が数多く行われている。しかしながら、被害観念の形成・持続要因、とりわけ認知・感情的要因に着目した研究はほとんど行われていない。本論文は、このような認知・感情的要因に着目し、被害観念の形成・持続要因を明らかにしたものである。被害観念の形成・持続要因を明らかにすることは、連続説を背景とした被害妄想の形成メカニズムの理解に寄与しうると考えられ、その臨床的意義は大きい。

本論文は 3 部から構成される。まず、第 1 部では、被害観念研究の理論的背景として、連続説に関する研究を中心に先行研究を概観した。次いで、第 2 部は 4 つの研究から構成され、他の症状と比較しつつ被害観念の特徴を把握したうえで（研究 1）、自己・他者についてのネガティブなスキーマ（研究 2、研究 3）、および特性怒り（研究 4）が被害観念の形成・持続要因となりうるかを縦断調査により検討した。最後に、第 3 部では、本研究の知見からの臨床的示唆について考察した。

研究 1 では、被害観念と社会不安認知の多次元比較を行い、被害観念の特徴を検討した。被害観念、社会不安それぞれについて、先行研究に基づく 8 つの次元を設定し、大学生 266 名を対象とした質問紙調査を実施した。その結果、被害観念は社会不安よりも違和感、他者の悪意の知覚、怒りが高く、社会不安は被害観念よりも確信度、頻度が高いことが示された。また、因子分析の結果、被害観念、社会不安共に同一の項目からなる、“苦悩”“他者への反応”の 2 因子が抽出され、被害観念は社会不安よりも、悪意の知覚および怒りの 2 つから構成される“他者への反応”因子得点が高いことが確認された。

研究 2 では、自己・他者へのスキーマに焦点を当て、健常者にもみられる誇大妄想的な観念と比較しつつ、被害観念と強く関連するスキーマを検討するため、大学生 123 名を対象とした質問紙調査を実施した。重回帰分析の結果、被害観念はネガティブな自己スキーマおよび他者スキーマと強く関連することが示された。一方、誇大観念はポジティブな自己スキーマと特異的に関連し、ネガティブな自己スキーマおよび他者スキーマとの間に有

意な関連は確認されなかった。

研究 3 では、ネガティブな自己スキーマおよび他者スキーマと被害観念の因果関係を検討するため、個人内要因とストレスとの交互作用により症状が生起するとする素因・ストレスモデルに基づく縦断研究を行った。素因としてネガティブな自己スキーマおよび他者スキーマを仮定し、大学生 101 名を対象に、約 1 ヶ月の間隔で 2 回の縦断調査を実施した。階層的重回帰分析の結果、ネガティブな他者スキーマについて、スキーマとストレスの交互作用が有意であった。交互作用の下位検定の結果、ネガティブな他者スキーマが強い者ほど強いストレスを体験すると被害観念が喚起されやすいことが明らかとなった。

最後に、研究 4 では特性怒りと被害観念との因果関係について検討するため、大学生 102 名を対象とした 1 ヶ月間隔の縦断調査を実施した。特性怒りと被害観念の双方向の因果パスを設定した同時効果モデルによる構造方程式モデリングの結果、2 回目調査時点において、特性怒りから被害観念に有意な正の効果パスが確認された。一方、被害観念から特性怒りへの有意な効果は確認されなかった。よって、特性怒りの強い者ほど被害観念を持ちやすい傾向が確認された。

本論文においては、以下の諸点が高く評価された。

1. 健常者にみられる症状と重篤な精神疾患にみられる症状との間の連続説に関する先行研究を整理し、被害観念研究の理論的背景と意義を明確にしたこと。
2. 被害観念の形成に関する認知モデルに基づき、実証データに裏付けされた議論を行っていること。
3. 先行研究では検討されていない被害観念の形成・持続要因について、特に認知・感情的要因に着目し、被害観念との因果関係を検討していること。縦断調査を行うことによって因果関係に踏み込み、横断データのみを用いた先行研究の問題を解決しようと試みたこと。
4. 被害観念の形成・持続要因を明らかにすることによる観念の予防の可能性や、被害観念と被害妄想との間の連続説を背景とした被害妄想の理解などに資すると思われる臨床的示唆を提示したこと。

なお、以上の研究の実施にあたって、倫理的な配慮は十分になされていると確認された。

以上の成果により、本論文は博士（学術）の学位に値するものであると、審査員全員が判定した。なお、研究 1 は *Psychological Reports* 誌上に、研究 2 は心理学研究誌上に、研究 4 は *Psychological Reports* 誌上に公表済みである。